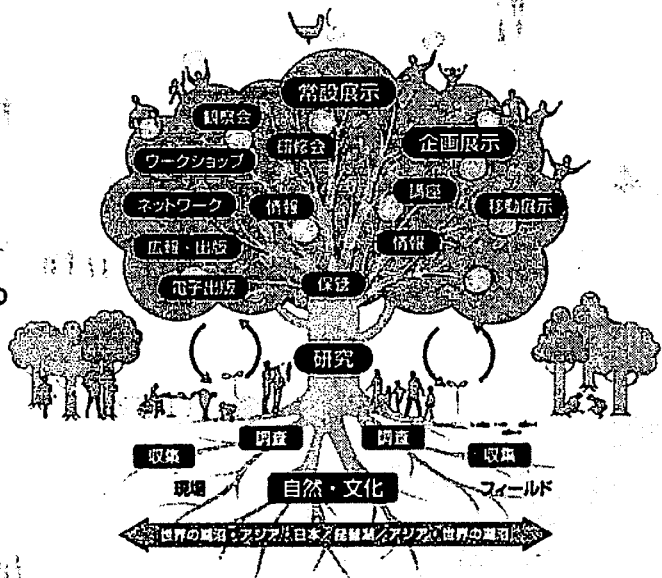


新琵琶湖博物館創造ビジョン

湖をめぐる博物館の「森」構想 ～博物館の「木」から地域の「森」へ～



平成 25 年(2013 年)3 月



滋賀県立
琵琶湖博物館

SHIGA MUSEUM GROUP

■琵琶湖博物館の使命・基本理念とめざすもの

(1) 使命(平成8年度～)

琵琶湖博物館は、研究・調査に基礎をおきながら交流・サービス、情報の収集・発信、資料整備、展示を総合的に行うことによって、琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしについての理解を深め、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていく。

(2) 基本理念(平成8年度～)

テーマをもった博物館

「湖と人間」というテーマにそって、未知の世界を研究し、成長・発展する博物館

フィールドへの誘いとなる博物館

魅力ある地域への入り口として、フィールドへの誘いの場となる博物館

交流の場としての博物館

多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にす博物館

(3) 中長期目標(平成14年度～)

「地域だれでも・どこでも博物館」の実現



使命、基本理念、中長期目標を継承し、これまでの評価や課題、社会や地域の要請をふまえ、「湖と人間」の新しい共存のあり方を提示するため、展示交流空間を再構築する



琵琶湖・淀川流域から「湖と人間」を考える
地域の人びとの誇りとなる博物館！

環境先進地域「関西」をリードする環境学習と情報の収集・発信の拠点
地域に根ざしながら広く世界を視野に入れた研究・交流のネットワーク施設

～博物館の「木」から地域の「森」へ～

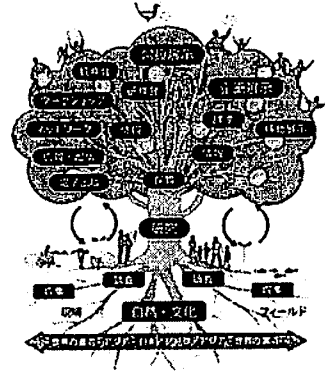
【琵琶湖博物館の活動イメージ】

<今の琵琶湖博物館>

成木になった琵琶湖博物館

研究・調査や交流活動などにより、多くの成果を生み出してきた一方で、展示構造が固定的なため、それらの成果を活かしきれていない課題に直面している。

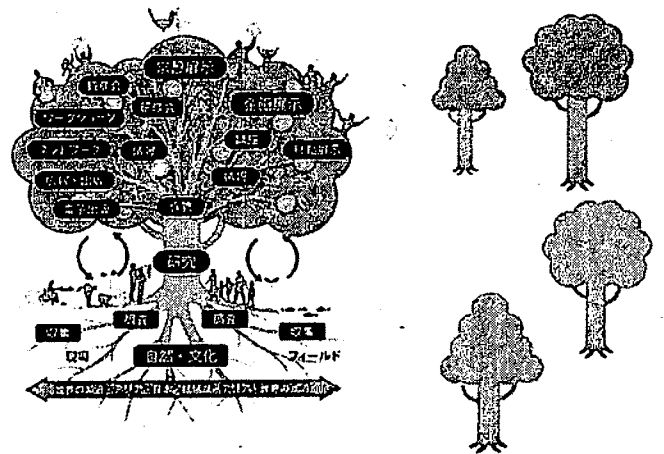
より魅力的な交流プログラムなどの開発も含め、時代に即した情報受発信力の強化を求められている。



<リニューアルをめざす新琵琶湖博物館>

親木となる琵琶湖博物館

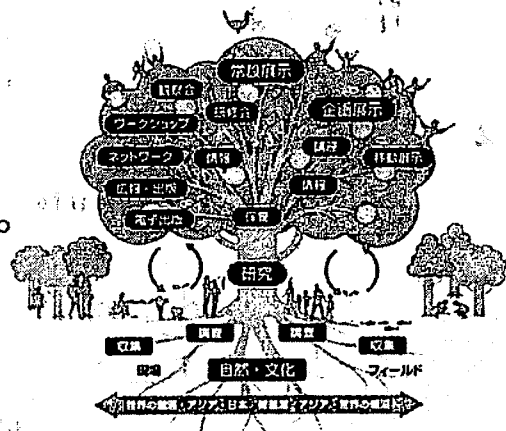
展示交流空間の再構築を通じて、タイムリーでわかりやすい情報受発信の機能を高め、より多くの人びとに琵琶湖博物館を利用してもらう。地域の人びと一人ひとりの心に「種子、挿し木、幼木」を渡していく博物館をめざす。



<将来的な地域の姿>

湖をめぐる博物館の「森」の誕生

琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしへの理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いた社会の実現。



目 次

第1章 琵琶湖博物館の現状と課題	
1 琵琶湖博物館の実績と現状 1
2 琵琶湖博物館に関するマーケット調査結果 4
3 琵琶湖博物館協議会からの意見11
第2章 リニューアルに向けた考え方	
1 対応が求められるターゲット層と利用者数の向上に向けた取り組み12
2 リニューアルに向けた考え方13
第3章 リニューアルのあらまし	
1 「湖と人間」の展示交流空間の再構築15
2 常設展示の再構築16
3 交流空間の再構築20
4 交流機能の強化22
5 利用者の視点に立った施設設備・運営の確保23
6 期待される効果24

1 琵琶湖博物館の実績と現状

(1) 経緯と評価

「湖と人間」をテーマに、10年の準備期間を経て平成8年に開館し、平成24年6月には来館者数800万人を達成した。

① 研究・調査

- ・ 博物館活動の根幹は研究・調査であると位置づけ、幅広いテーマで地域の人びとや外部研究機関等とともに取り組み、その成果を展示や交流活動に活かし、成長・発展する博物館を目指してきた。
- ・ 「湖と人間」をテーマとする学際的・総合的な課題に取り組む総合研究10件、外部研究者とともに行う共同研究85件を実施し、研究成果も蓄積されてきた。
- ・ 研究・調査により、琵琶湖や滋賀県からプランクトンや昆虫などの新種50種、新記録種152種、計202種類を発見した。
- ・ 外部資金の獲得に積極的に努め、科学研究費補助金36件が採択され、環境省等の委託研究なども推進している。
- ・ 水族展示は、魚類を中心に約170種、17,000点を飼育しており、淡水生物を扱う施設としては日本最大級である。また、天然記念物や絶滅危惧種など約40種を系統繁殖する保護増殖センターを併設するなど、日本を代表する希少淡水魚類の系統保存の施設となっている。
- ・ こうした成果をもとに企画展示20回、ギャラリー展示29回、トピック展示197回を開催、公表してきたが、それらを常設展示に反映できてない。

② 交流・サービス

- ・ 観察会・体験教室・講座を年間200回以上開催し、学習機会の充実を図っている。
- ・ 全国に先駆け、博物館の事業・研究に地域の人びとが自主的にかかわる「はしかけ」（現登録者数356名）や、身近な地域を調査し、その情報を博物館の展示、交流、研究に活かす「フィールドレポーター」（現登録者数90名）の制度は、他館のモデルとなっている。こうした取り組みにより、博物館活動が地域へ広がる芽が育ってきた。

③ 資料の集積・発信

- ・ これまでに地学資料、生物資料、歴史資料、民俗資料等について、貴重なコレクションを含め累計85万点の資料を収集し、45万点を整理してきた。これらの資料を公開する必要性に迫られている。
- ・ インターネットでも検索できるよう、資料データベース17分野、学習活動に役立つ電子図鑑8分野を公開している。

④館外有識者から見た琵琶湖博物館

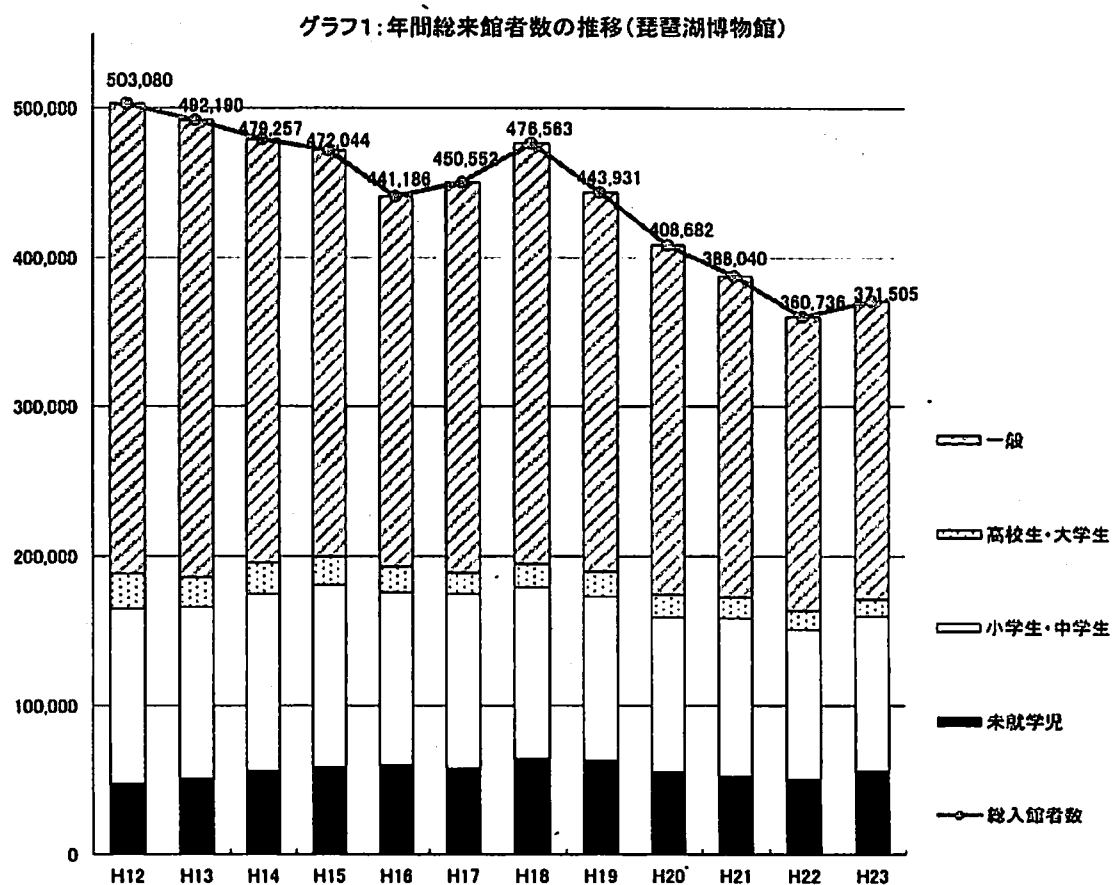
琵琶湖博物館に対する外部からの評価例としては、下記などがある。

- ・「市民参加を達成した琵琶湖博物館」
- ・「第一線の研究を行っている、専門領域をきわめた学芸員が県民とじかに接触する道をつくり、研究の最前線情報を県民に知らせるとともに、新たに県民とともに研究を進展させる姿勢がある」
- ・「どこにでもあるものの展示のなかから足下を見直すきっかけになる発見をさせてくれる。だからおもしろい」

<出典:水藤真(東京女子大学教授)『博物館を考える』山川出版社 1998年>

(2) 来館者数

- ・地域に根ざした活動が深まり、広がりを見せる一方で、平成12年度に50万人だった年間来館者数が平成23年度には37万人に減少している。(グラフ1参照)



- ・平成12年度以降の来館者の推移を見ると、平成17年、18年度は黄色い(黄金の)ナマズの登場、10周年記念イベントなどにより一時的に回復したものの、平成19年度に再び減少に転じ、それ以降は減少を続けている。

- ・平成23年度は「あさ、ひる、ばん博物館を楽しもう」や「クールライフキャンペーン」などにより、来館者数が前年度に比べて約1万人増加した。
- ・年間総来館者数の減少は、「一般」(大人)の来館者の減少分とほぼ一致している。

(3) 社会情勢の変化

- ・少子高齢化が進み、高度成長の時代から生活の質を重視する生活中心の時代・成熟の時代へと変化している。
- ・環境に対する考え方や価値観が多様化し、また生物多様性や持続可能社会などの新たな環境観が社会に広まった。
- ・外来生物の移入、鳥獣害の深刻化、琵琶湖深層部の低酸素化など新たな環境課題が明らかになり、それらに対応する情報発信や学びの場が求められている。
- ・地球温暖化対策としての低炭素社会の実現など、新たな社会の動きへの対応が求められている。
- ・府県域にとどまらない自然共生型社会づくりなど、広域的な環境保全の要請が増えている。

2 琵琶湖博物館に関するマーケット調査結果

開館以来16年の間、研究・調査は進展し、多くの知見が蓄積されてきた。一方で、情報のあふれる現代社会に生きる人びとの意識やニーズは多様化し、新たな課題も顕在化しているが、琵琶湖博物館の展示はこうした変化に対応しておらず、これまで展示で伝えきれていなかったことを新しい琵琶湖博物館では発信していきたいと考えている。

開館20周年を前に、これまでの成果や課題をふまえ、現況を検証し、人びとの暮らしの中に琵琶湖博物館が定着し、将来にわたって利用されるためにどう進化すべきかを探ることとした。

(1) 調査の概要

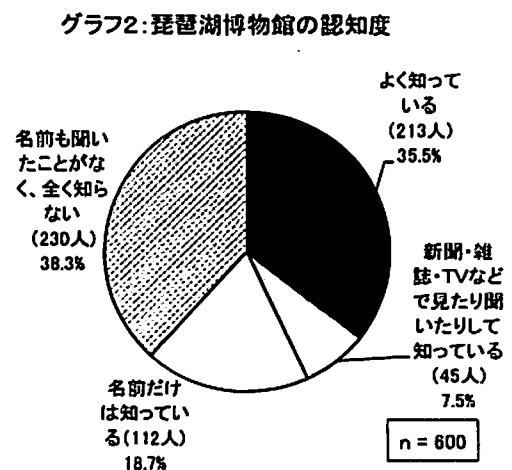
下記により琵琶湖博物館に関するマーケット調査を行った。

- ①琵琶湖博物館は開館以来、継続して「来館者アンケート調査」を実施、また「学校団体アンケート調査」を行っており、この調査に基づいて、来館者の推移や傾向を把握する。
- ②「インターネット調査」を平成24年10月22日～23日に実施し、琵琶湖博物館の利用者・非利用者の傾向、施設の認知度等を把握する。
- ③「館内アンケート調査」を平成24年10月19日～21日に実施し、琵琶湖博物館の各室・設備・サービス等に対する来館者の満足度やニーズを把握する。

(2) 琵琶湖博物館の認知度

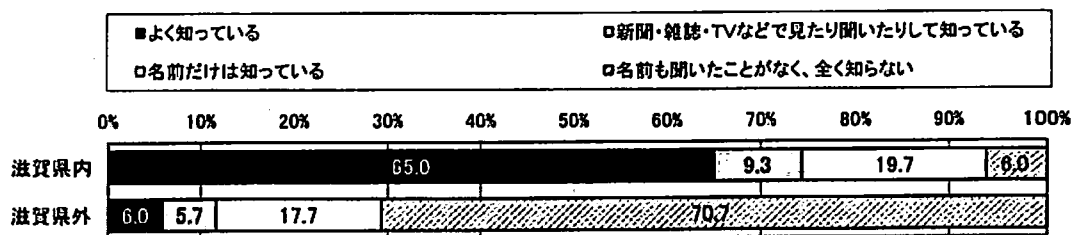
②インターネット調査(600サンプル:滋賀県内300,京阪神200,東海その他100:平成24年10月22日・23日に実施)より

- ・琵琶湖博物館について、「名前も聞いたことがなく、全く知らない」と答えた人が4割弱(38.3%)を占めている。(グラフ2参照)



- ・ 滋賀県内では琵琶湖博物館を「よく知っている」と答えた人は7割弱(65.0%)と高いが、近隣の他府県では琵琶湖博物館を知らない人が7割(70.7%)に上る。(グラフ3参照)

グラフ3: 琵琶湖博物館の認知度(居住地別)



(3) 琵琶湖博物館の利用者像

① 琵琶湖博物館による継続調査結果より

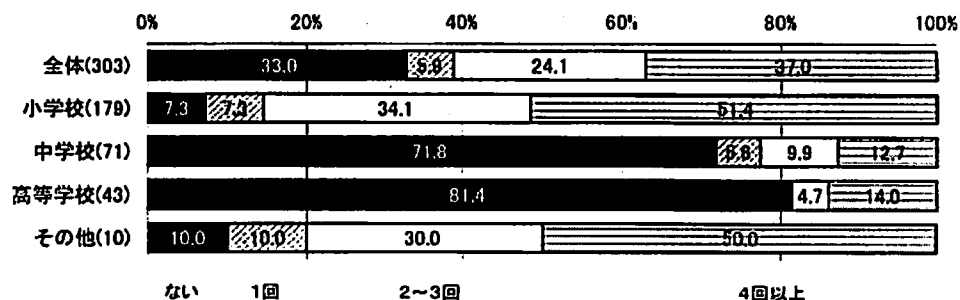
- ・ 年間総来館者数の減少は、「一般」(大人)の来館者数の落ち込みが大きく影響している。(p2 グラフ1参照)
- ・ 学校団体の利用は、比較的安定はしているものの、学校数・人数ともに漸減傾向である。
- ・ 利用した展示や施設は、水族展示が特に高く、80~90%を維持しているが、その他の展示室は60~80%で推移している。
- ・ 平成12年度以降から、アンケートの記述に「かわりばえない」「情報が最新でない」といった意見が見られるようになってきた。
- ・ 「不便だったこと、不満に思ったこと」は、常設展示室への不満回答がやや上昇傾向にある。また、昼食場所、交通の便、駐車場、道路案内、観覧料金への不満が多い。

⇒ 大人の落ち込み、学校団体の減少に歯止めをかけるような展示やイベント、施設改修について対応しきれていないと考えられる。

第1章 琵琶湖博物館の現状と課題

- 5年以内の県内学校団体の利用について、小学校では、来館したことが「ない」は低い、中学校、高等学校では「ない」が大半で、中学校で7割強(71.8%)、高等学校で8割強(81.4%)となっている。(グラフ4参照)

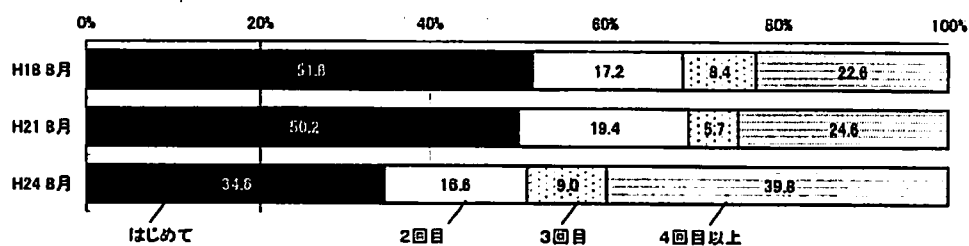
グラフ4: 学校団体の利用動向(①学校団体アンケート調査) 平成23年度



⇒中学校以降では、自分で課題を設定し解決できるような学習を求めるようになっており、学年が上がるほど博物館高度利用へのニーズがあると考えられる。

- 来館回数の経年変化では、「はじめて」が減少し、「4回目以上」が増加している。(グラフ5参照)

グラフ5: 来館回数の経年変化(①来館者アンケート調査)



⇒「はじめて」は年を追って減少しており、新規性・話題性が薄れてきたことが原因であると考えられる。

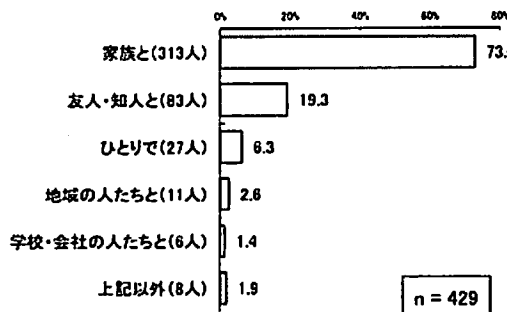
⇒一方で「4回目以上」は年を追って増加しており、今後さらにリピーター対応が必要であると考えられる。

第1章 琵琶湖博物館の現状と課題

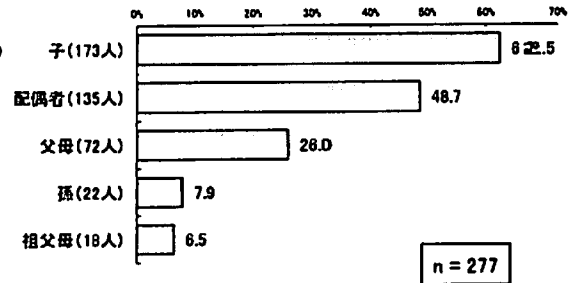
③館内アンケート調査(小学5年生以上の来館者への自記式、429 サンプル:平成 24 年 10 月 19 日~21 日に実施)より

- ・「本日はどなたと来館」したかに関する回答を見ると、「家族と」が全体の7割以上(73.0%)と圧倒的に多い。(グラフ6参照)
- ・「子どもと訪れている親」「父母と訪れている子ども」の回答が多い(親子での来館者が多い)。(グラフ7参照)

グラフ6: 来館にあたっての同伴者の割合
(③館内アンケート調査)



グラフ7: 家族同伴者の内訳と割合
(③館内アンケート調査)



①琵琶湖博物館による継続調査結果より

- ・琵琶湖博物館だけを目的とする来館者数の割合は、平成 19 年の 60%から平成 24 年には 40%前後に低下している。
- ・主な立ち寄り先としては、「道の駅グリーンプラザからすま」「水生植物公園みずの森」「イオンモール草津(平成 20 年オープン)」があげられている。

⇒余暇時間の過ごし方の多様化等により、周辺施設等とセットで回遊する志向が高まっていると考えられる。

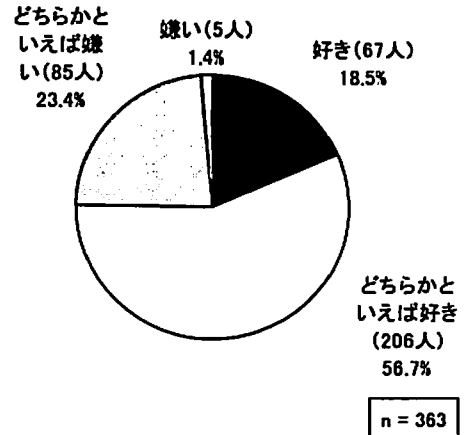
⇒1 日中過ごせる博物館としての機能が十分でないと考えられる。

(4) 琵琶湖博物館の非利用者像

②インターネット調査(600 サンプル:滋賀県内 300、京阪神 200、東海その他 100;平成 24 年 10 月 22 日・23 日に実施)より

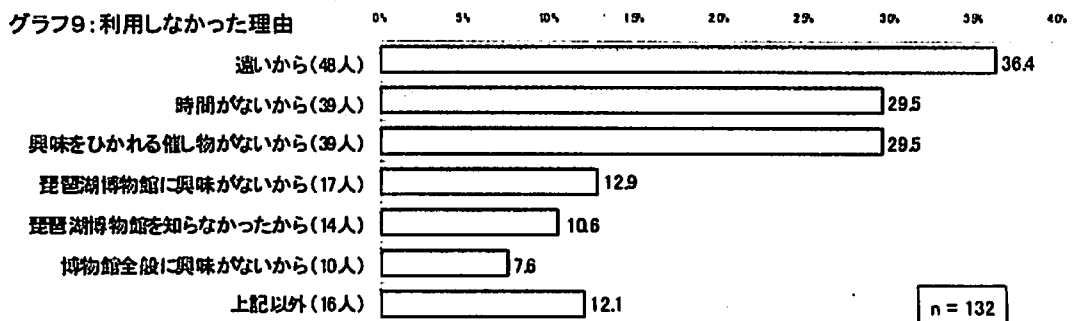
グラフ8:非利用者の博物館に対する好き嫌いの割合

- 琵琶湖博物館の非利用者は、600 人中 363 人、うち8割弱(76.0%)が県外の人である。
- 非利用者の5割弱(47.1%)は、他の「博物館」を訪れており、7割以上(75.2%)の人は「博物館は好き」と答えている。(グラフ8参照)



⇒非利用者においても、博物館そのものを嫌いではなく、内容やきっかけによって琵琶湖博物館に来ていただける潜在利用者層であると考えられる。

- 琵琶湖博物館を利用したことがないと答えた人の主な理由は、「遠い(4割弱/36.4%)」「時間がない(3割弱/29.5%)」「興味をひかれる催し物がない(3割弱/29.5%)」などがあげられる。(グラフ9参照)



⇒非利用の理由のうち、「博物館全般に興味がないから」という人は少数で、「興味をひかれる催し物がないから」という人が多いことから、琵琶湖博物館の魅力を向上することにより、「遠いから」「時間がないから」という人も含め、潜在利用者に来館していただくことが可能であると考えられる。

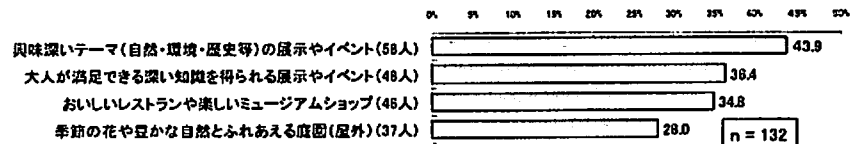
(5) 琵琶湖博物館への期待

- ②インターネット調査(600 サンプル:滋賀県内 300、京阪神 200、東海その他 100:平成 24 年 10 月 22 日・23 日に実施)および
- ③館内アンケート調査(小学5年生以上の来館者への自記式、429 サンプル:平成 24 年 10 月 19 日～21 日に実施)より

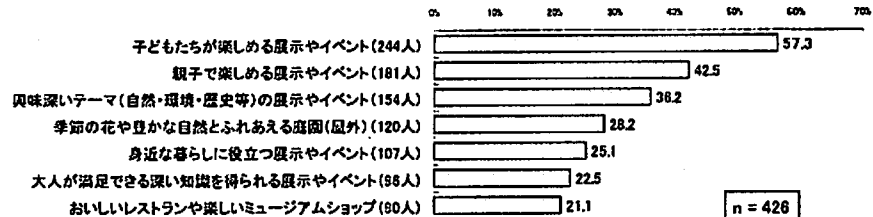
要望の多いもの

- ・ 興味深いテーマ(自然・環境・歴史等)の展示やイベント
- ・ 大人が満足できる深い知識を得られる展示やイベント
- ・ おいしいレストランや楽しいミュージアムショップ、休憩スペースの充実
- ・ 親子で楽しむ、子どもも楽しめる展示やイベント
- ・ 地域における自然体験イベント
- ・ 地域や環境に関する学習の推進、情報の発信、研究・調査

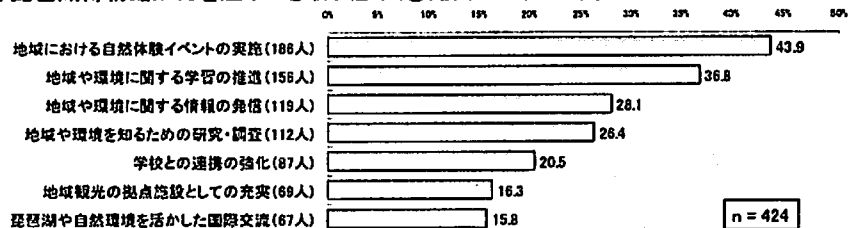
グラフ10:非来館者が来館したくなる取り組み(②インターネット調査)



グラフ11:今後、琵琶湖博物館で参加したい取り組み(③館内アンケート調査)



グラフ12:今後、琵琶湖博物館が力を注ぐべき取り組み(③館内アンケート調査)



⇒来館者、非来館者とも、地域・自然・環境に関する展示やイベント、学習、情報のニーズが高い。非来館者は大人が満足できる展示やイベント、おいしいレストランや楽しいミュージアムショップ、季節の花や豊かな自然と触れ合える庭園の充実への要望が多い。記述回答では、ここでしかない展示、「何度でも行きたくなる」新たな魅力ある展示や更新性、親子で楽しむ、子どもや幅広い年代の人びとが楽しめる展示やイベント、興味を引く展示、参加・体験型の展示等への期待が多い。

(6) 県内外における博物館の一般的な利用状況

観光客のニーズ

- ・ 滋賀県を訪れる観光客の半数以上が「自然・琵琶湖」に興味を持っている。
- ・ 博物館に行ったことのある人の9割以上が旅先で博物館を訪れており、その理由は「観たい展示物がある」「興味を抱く建物や庭園がある」「博物館の周辺に行きたい観光地がある」が多い。

(滋賀県商工観光労働部観光交流局『平成22年 滋賀県観光動態調査』、
JTB WEBアンケート『美術館・博物館に関するアンケート調査』2012年)

親子連れの利用

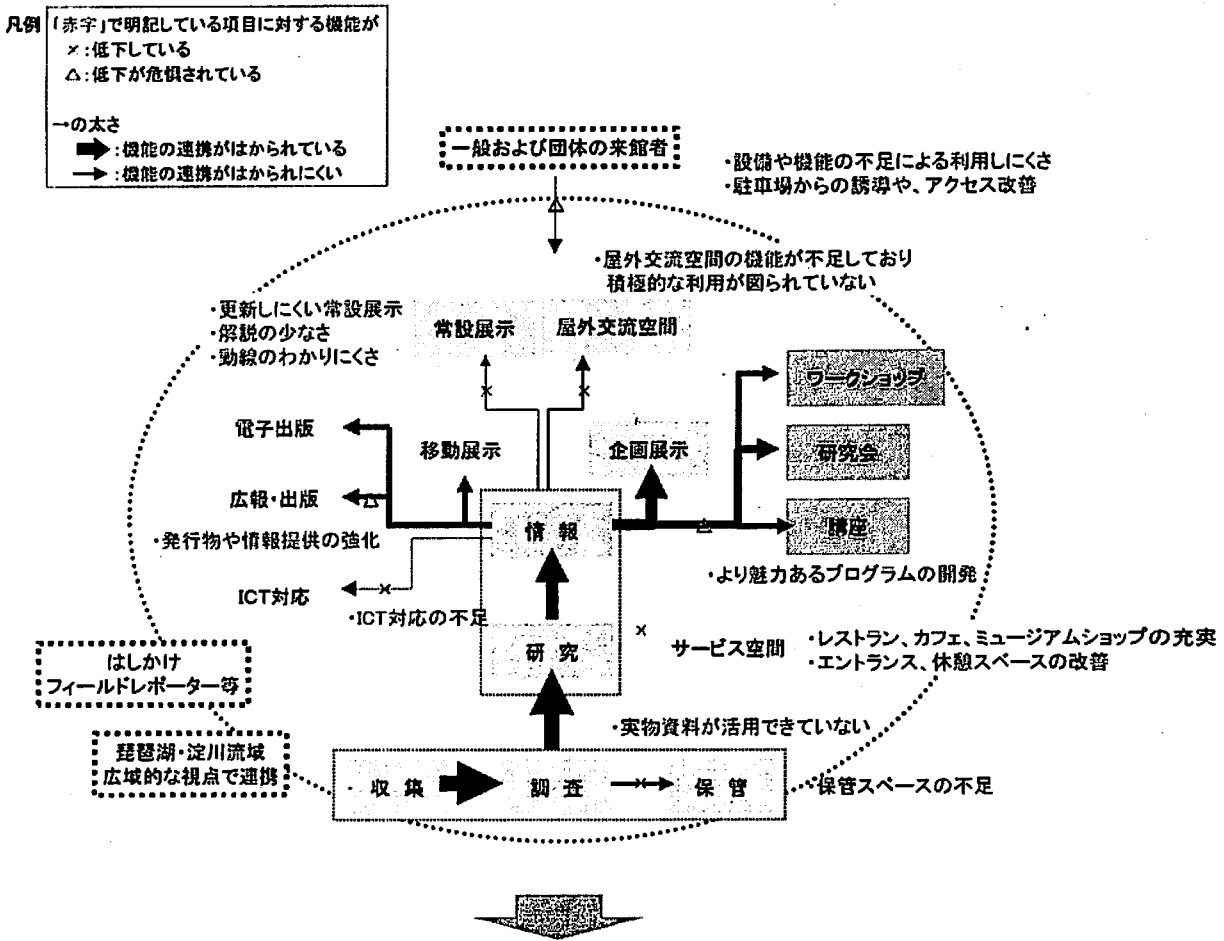
- ・ 自分が子どもの頃に親と一緒に博物館に行ったことのある人の方が、親になってから子どもと一緒に博物館に行くことが多い。
- ・ 自然系博物館などを含む「科学博物館」は、子どもが大きくなるにつれて親の利用が少なくなる。

(第一生命経済研究所『美術館・博物館の利用に関するアンケート調査』2005年)

3 琵琶湖博物館協議会からの意見

- 学べる、楽しめる、遊べる、ためになる工夫、要素の導入
- 大人が一人でも行ってみたい、再来してみたい、学んだり遊びたい気持ちになれる場
- 退職者や高齢者の来館を促す、魅力の向上や手法の開発
- 大人のみならず、子どもが主役になれる場、未来を担う子どもたちにメッセージを伝える
- 1日過ごせる博物館としての施設・企画面の充実

現在の琵琶湖博物館の機能イメージ



琵琶湖博物館の機能を、だれもがさらに利用しやすいものへと変えていく必要がある

1 対応が求められるターゲット層と利用者数の向上に向けた取り組み

大人の潜在利用者層

- 館の存在や展示・イベント等の魅力を伝える情報発信力の強化
- 大人が一人でも利用できる(利用したいと感じる)、楽しめる展示やサービス、イベントの提供、レファレンス等の機能強化
- 大学生等の若者の来館動機を生み出す展示やサービスの開発、プロモーション等の推進

親子利用者層

- 子どもの頃から琵琶湖博物館に親しんでもらえるよう、子どもが楽しめる展示やイベントの開発
- 親子で楽しめ、大人になっても利用したいと思わせる展示・体験空間の提供
- 子どもが大きくなって、子育てに時間を取られない世代となっても、興味をひきつけ持続的な利用者となってもらう展示・体験空間の提供

観光客

- 観光客が興味を抱く展示やイベント、季節ごとに楽しめる屋外の見学や体験の充実
- 周辺観光スポットとの連携

2 リニューアルに向けた考え方

「湖と人間」のかかわりを考えるためには、さまざまなつながりの持つ意味について理解を深める必要がある。それは、湖をはじめとした環境の中にあるつながりや、環境と人間、人間社会、それらの過去から未来へと向かうつながりである。

琵琶湖博物館は、人びととともに「湖と人間」のこれからの新しい関係を考えていくために、日常がこうしたつながりの中にあり、それらが変化し続けていることをわかりやすく提示し、未来への視点を持ち、現在はいかにあるべきかを問い続ける。

さらに、地域の人びとの知りたい、学びたい、自己実現したいという思いを応援し、人びとが日常的に博物館を利用することによって、地域とのつながりが生まれ、人や情報が行きかいながら、新たな活動の輪が広がっていくことをめざす。

(1) 5つの基礎機能の改善・発展

琵琶湖博物館の5つの基礎機能について、社会の変化をふまえ、地域や利用者の目線に立った改善・発展が求められている。

① 研究・調査

- ・ 開館以来 16 年が経ち、研究・調査の進展に伴い、多くの知見や研究成果を蓄積していることを活かし、過去、現在、未来をとらえ直し、「湖と人間」のより良い共存関係を考える新たな発信を常設展示で行う。
- ・ 琵琶湖博物館の活動の基礎となる研究・調査がさらに進展するように、研究体制や環境、条件を整えていく。

② 交流・サービス

- ・ より魅力あるプログラムの開発と提供、およびそれについての情報受発信を行う。
- ・ より多くの人々が琵琶湖博物館と多様な形で関わり、能力を発揮する場となる新たな制度を創設する。
- ・ これまで関心が薄かった層にも琵琶湖博物館に親しみが持てるよう、レストラン、カフェ、ショップ等のアミューズメント機能を強化し、屋外空間の積極的な活用による交流施設の充実をはかる。
- ・ 大学等との連携により、大学生などの琵琶湖博物館の利用機会を拡充する。

③ 情報

- ・ 開館以来 16 年経つ館全体の情報機器について、必要とされる機器と手段を十分精査し、通信、案内および展示用音声・映像機器等を総合的に改修する。
- ・ 繰り返し利用できる生涯学習の場として、ICT(情報通信技術)活用やレファレンス等の機能を充実する。

- ・ 広域連携を視野に入れた情報の交流・受発信を行う。
- ・ 時代に即した情報発信機能や、刊行物(パンフレット等)の強化をはかっている。

④資料整備

- ・ 開館以来、研究・調査や寄贈・購入を通じて収集・整理し、収蔵庫に保管している膨大な資料・標本を展示等に積極的に活用する。
- ・ 貴重な資料・標本を良好な状態で維持・保存するため、効果的な IPM(総合的有害生物管理)を推進し、そのための施設整備をはかる。
- ・ 災害時に備えた資料・標本の保管環境を整える。
- ・ 今後の収蔵・保管にあたり、多くの大型資料・標本の受け入れを支障なく継続していく施設対応を検討する。

⑤展示

- ・ 蓄積した研究・調査の成果、収集した資料・標本や、地域の人びとが所有する貴重な資料等の展示を可能にするため、資料の内容を随時更新できる可変性の高い展示空間へと改修を行う。
- ・ 多くの実物資料が、その持っている魅力を十分に実感させるような展示としていく。
- ・ 環境先進県として、開館以降の湖と人間をとりまく課題に対する展示と更新を行う。

(2)周辺環境の改善

琵琶湖博物館の周辺整備について、開館以降大きく進展した技術を施設・設備に取り入れ、また年齢や障害、国籍等にかかわらず楽しめる利用環境にするための改善が求められている。

- ・ 自然や環境について考えてもらうきっかけとなる施設として、低炭素社会の実現に向けた省エネの推進、環境配慮型システム、再生可能エネルギーの利用促進をはかる。
- ・ 多様な人びとを受け入れる国際化と、ユニバーサルデザイン化をさらに推進する。

1 「湖と人間」の展示交流空間の再構築

新たなコンセプト

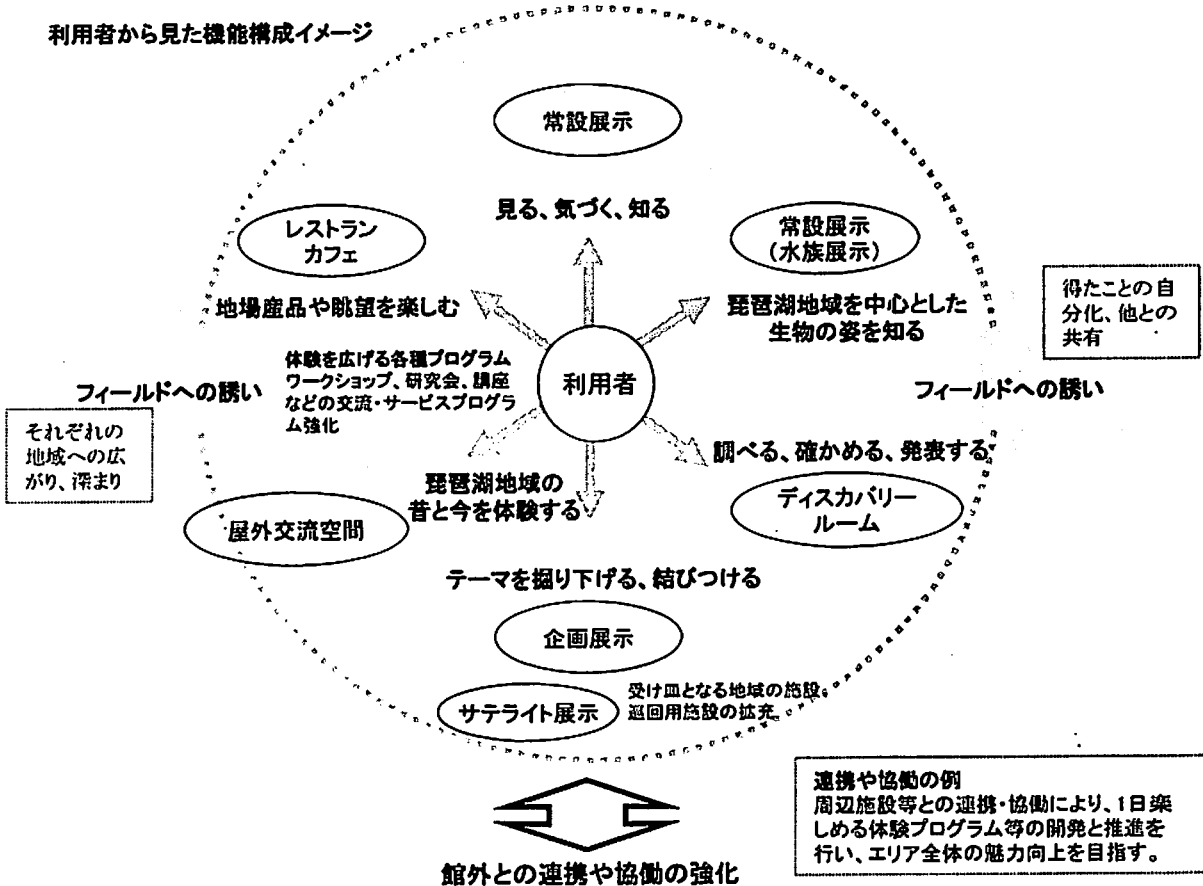
子ども、高齢者を含む一般来館者から、身近な自然の不思議や歴史・生活・文化の魅力を探ってみたいさまざまな利用者にとって、多くの発見や交流、学びと楽しみの機会に満ちた空間となるリニューアルをめざす。

大人も子どもも楽しめる、活用できる博物館

子ども、高齢者を含む一般来館者から、身近な自然の不思議や歴史・生活・文化の魅力を探ってみたいさまざまな利用者にとって、多くの発見や交流、学びと楽しみの機会に満ちた空間となるリニューアルをめざす。

- 自分と琵琶湖地域のかかわりを意識できる展示やプログラム等を整備する。
展示交流空間に応じたプログラムで、自分とのかかわりを見出してもらう
- 展示をはじめ、屋外交流空間やレストランなどにおいても多様な発見や体験を提供する。
だれもが一日楽しめる学びと遊び心がある博物館
- さまざまな体験や交流を通じて「湖と人間」のあり方に向き合える場となることをめざす。
利用者が体験や交流を通じてあらためて知識、価値観、世界観を見直し、フィールドへ出かけるきっかけづくりの場

利用者から見た機能構成イメージ



2 常設展示の再構築

(1) 基本的な考え方

新たなコンセプト「高度化・複雑化した情報をわかりやすく、タイムリーに伝える博物館」と「大人も日常的に楽しめる、活用できる博物館」のもと、実物資料を中心にした展示で、展示資料の更新も容易な展示空間を整備する。

「湖と人間」の関係性がより詳しくわかる工夫と、日常での気づきを促し、自分とのかかわりを意識できる(自分化を促す)機能により、未来の「湖と人間」を考える発信力の高い展示をめざす。

また、湖との関わりが薄いと感じている人びと、湖が身近にない人びとにとっても、展示をきっかけとして、身近な環境と自分との関係を見つめ直すことにより、湖を含めたさまざまな環境とのつながりを意識し、より大きく地球環境との関係も考えることを促すような深みのある展示をめざしていく。

<主なポイント>

- 実物資料(本物)を活かした感動をよぶ展示
- 展示更新が随時行われ、来るたびに新鮮で新しい発見のある展示
- 子どもたちにとってもわかりやすく楽しい、参加型の展示
- 自分たちの日常とのかかわりが意識できる展示(自分化できる展示)
- 暮らしと自然にかかわる価値観の変化や新たな環境課題に対して、最新の研究成果や考え方を提示する学びの展示
- 地域の人びとの研究調査成果や収集資料を紹介する市民とつくる展示

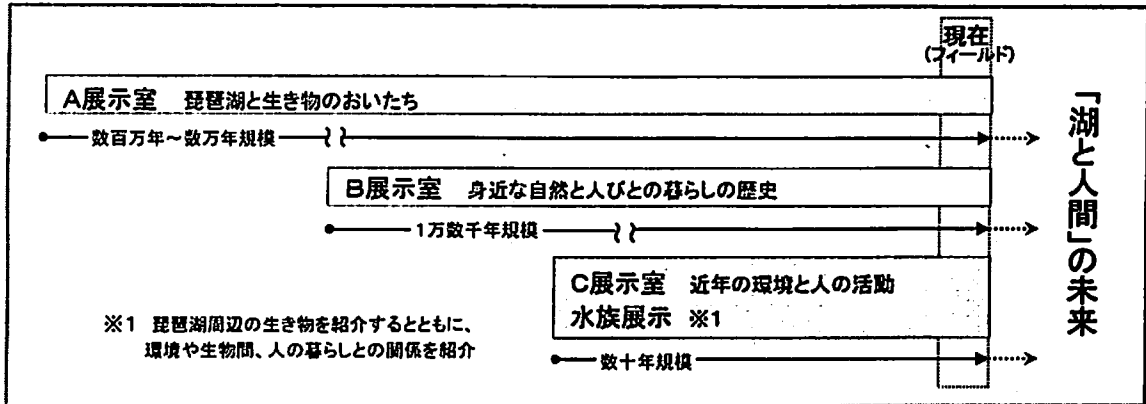
展示構成・展開の対比

	現在の展示	リニューアルでめざす展示
展示資料	ジオラマやレプリカ等の比重が高めである	実物資料(本物)を徹底的に活かした展示で構成する
資料の更新性	低い(固定的)	高い(可変的)
同時代性・話題性への対応	タイムリーに対応しにくい	タイムリーに対応しやすい
最新の研究成果の発信	固定的な展示が多く、研究成果を発表しにくい	新しい話題を提供し続ける更新性の高い展示空間
フィールドへの誘い	フィールド情報の紹介	3つの異なる時間スケールで理解できる「現在」の紹介を行うことでフィールドへ誘う
地域の人びとがつくる展示	展示スペースを確保しにくい	常設展示で紹介しきれないフィールド情報や資料を地域の人びととの連携によって紹介(コラボ展示)

(2) 展示ストーリーの考え方

「湖と人間」の未来を考えることができる展示をめざす。そのために、「現在」をとらえなおす3つの異なる時間スケールを設定し、それぞれの時間スケールによって理解できる自然や人びとの暮らしの変化、その関係性を伝える。そして、それぞれの時間スケールにおいて、理解しようとする「現在」を紹介することで、フィールドへ誘う。

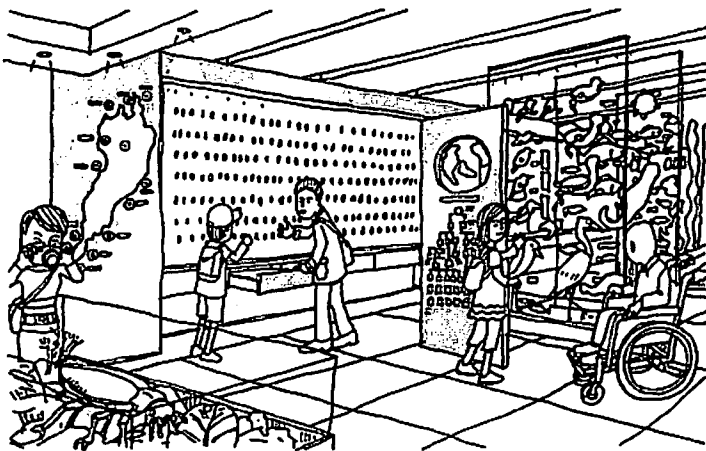
未来を考えることができる展示



(3) 展示室ごとのテーマ構成

【A展示室: 琵琶湖と生き物のおいたち】

- 現在までの数百万年～数万年という長い時間スケールをとることによって理解できる現象と変化を知る展示空間。現在の琵琶湖やその環境、生き物があるバックグラウンドとして、人がかかわらないで起きる自然の営みと、生き物としての人を知ることで、B展示室やC展示室へ向け、人とは何かを考えてもらう気づきの機能も担わせる。
- 現在の琵琶湖にしかない生き物の紹介とそこにいる理由の問いかけから始まり、過去へとさかのぼることによって、琵琶湖とその生き物の生い立ちや、いなくなった生き物を紹介する。長い時間スケールの中での地球の活動や気候変化により形成された琵琶湖の姿、生き物の進化と絶滅、移動などを紹介する。
- 長い時間スケールで考えるべき事象について、地域の博物館や人びとと連携した化石、岩石、生物などの展示を行う。



展示室イメージ

蓄積された実物資料を利活用しやすい可変性の高い展示システム

【B展示室: 身近な自然と人びとの暮らしの歴史】

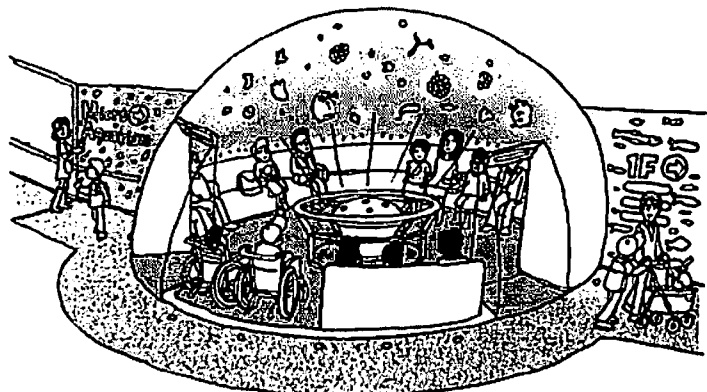
- 人が定住をするようになってから現在までの1万数千年の時間スケールによって理解できる自然のリズムや変遷の中での、人びとの暮らしや自然観・生き物観を紹介する展示空間。
- 現在に残る伝統的な食文化や祭りなどの紹介をはじめ、湖と人間のそれぞれの変化と互いに与えてきた影響を歴史的に振り返り、フィールドへと誘う。
- この展示室で扱う時間スケールでとらえた事象について、地域の博物館や人びとと連携した展示を行う。

【C展示室: 近年の環境と人の活動】

- 近年に起きた自然環境や人の暮らしの変化といった数十年の時間スケールによって理解できる事象を紹介することで、「湖と人間」のこれからのあり方を探る象徴的な展示空間。
- 高度経済成長期以降に起きた環境変化や、琵琶湖が抱える新たな課題、暮らしと湖の関わりの変化などについて、分野を横断することによって見える関係性を中心とした多様な視点で紹介する。
- 学芸職員による最新の研究成果を定期的に更新しながら紹介する「研究最前線(仮)」コーナーを設け、興味深い話題や問題をいち早く展示することで、常に新しい話題を展示によって提供し続ける。
- 数十年の時間スケールで考えるべき事象や現在の琵琶湖地域の事柄について、地域の博物館や人びとと連携した展示を行う。

【水族展示】

- C展示室2階部分とあわせ、近年の環境を、生き物を中心に示す展示。琵琶湖とその周辺の淡水水域を中心とした生き物を主役とし、その生態、生物間や人の暮らし、特に漁業などとの関係性を紹介する。
- 湖岸から琵琶湖への場の変化に対応した生き物とその生態を紹介する展示を増設し、琵琶湖の多様な環境について生き物を通して紹介する。
- 琵琶湖生態系を根底で支える小さな生き物を、観覧者がその場に入り込んだような体験ができる展示を通して紹介する「マイクロアクアリウム(仮称)」を新設する。



「マイクロアクリウム(仮称)」 展示展開イメージ
観覧者自身が微生物サイズになったようなドーム型シアターで、肉眼では見えにくい琵琶湖の生態系を支えているプランクトンなど小さな生き物の姿や生態をライブで見ることができる。



3 交流空間の再構築

参加と発見、対話と交流を促す空間として、博物館の楽しさを感じ、知的好奇心を育み、新たな活動の場となる空間の整備を行う。

(1)「大人のディスカバリールーム(仮称)」の新設 ～多様な実物資料類にふれ、調べられる空間

- 資料・標本や剥製、図鑑を備え、来館者が自由に実物資料に触れ、調べ、観察できる、大人の興味や探究心に応えるコレクションルームを新設する。
- 一角では、琵琶湖博物館スタッフや地域の人びとの研究・調査等の活動を見学し、交流もできる、琵琶湖博物館への関心や愛着、参加意欲につながる学習交流空間とする。
- 琵琶湖の魅力がわかるさまざまな情報の提供を行い、一般の利用者から高度利用者まで、興味に応じた利用ができる施設とし、だれもが立ち寄りやすいように、開放的なオープンスペースを併設する。



「大人のディスカバリールーム(仮称)」展開イメージ
新たな利用者層が集う、大人に繰り返し利用されるような
空間を新設。



参考: オーストラリア博物館

(2) ICT(情報通信技術)を活用した交流空間

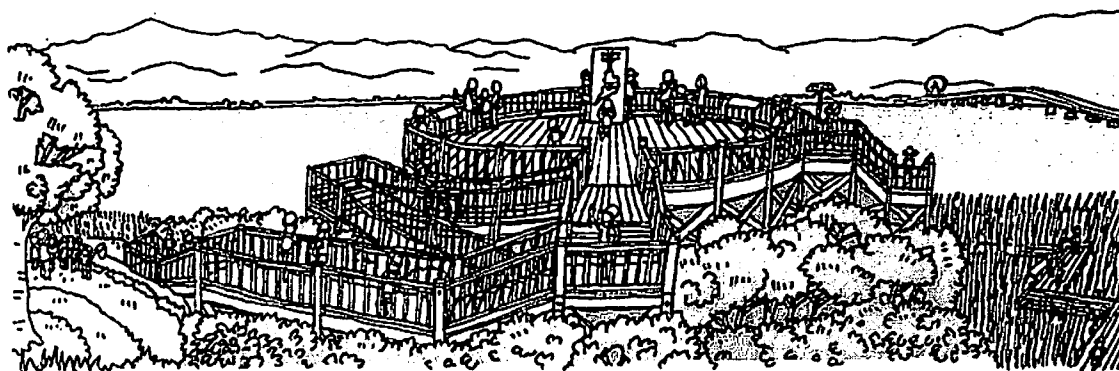
- ICTを活用した全館Wi-Fi化や多言語化対応など、快適でスピーディな学習環境を整備する。
- ICTを活用し、博物館情報を効率的、効果的に受発信し、交流を推進する。

(3) 体験型交流空間

- 琵琶湖博物館が所蔵している昔の道具の使用体験、参加者と対話し交流するサイエンスカフェやミニ講座など、過去を理解し、新しいことを発見する学びの場の充実や交流を育む空間として、「公開型博物館活動交流室」や「体験型交流空間」等を整備する。

(4)屋外交流空間

- 琵琶湖博物館周辺の琵琶湖やヨシ帯とつながり、自然を体感できる屋外交流空間とする。
- 琵琶湖博物館利用者と協働しながら、周辺の豊かな自然を利用し、過去の里山や農村の暮らしなどを体験できる屋外交流空間を整備していく。



屋外交流空間の展開イメージ

琵琶湖と琵琶湖博物館を繋ぐ空間として、季節を感じられる野草などのある里山環境を整備する。はしかけの活動、川(魚)遊びができるエリアや来館者が気軽に入っている林、琵琶湖の眺望を楽しめる展望台、ヨシ帯を散策できるトレイルなどを整備。

(5)レストラン等アミューズメント機能

レストラン、カフェ、ミュージアムショップの魅力向上をめざす。

- 地元の食材や独自の調理方法を考慮した魅力的なメニューや特産品を楽しめるレストランとして、話題創出と魅力向上、集客率の向上もめざす。
- 食材の成り立ちや地域とのかかわりを紹介したミニ展示やグラフィックを設け、食を楽しみながら学べる情報の提供を行いながら、琵琶湖博物館らしさを生み出す。
- 琵琶湖を眺望できるゆったりとしたカフェ、オリジナルグッズ等の開発や販売もめざす。



参考:「酢の里」の酢づくりの工程紹介展示
食材の成り立ちや、食品加工技術を紹介したミニ
チュア展示なども検討。
※参考例は企業博物館内展示

4 交流機能の強化

だれにとっても居心地が良く、開かれたわかりやすい交流活動の推進と情報受発信の強化により、琵琶湖博物館の活動がさらに見えて伝わり、さまざまな人びとの多様なつながりを広げていくことをめざす。

(1) 博物館活動の交流基盤機能の強化

- 琵琶湖博物館の交流活動を、だれに対しても開かれ、わかりやすく利用しやすいものとしていくため、博物館活動の窓口機能の統合、受付機能や交流案内機能のユニバーサルデザイン化、情報受発信力の強化をはかる。
- 新しい博物館の交流のあり方を内外に示していくため、個人、地域、NPO、研究機関、企業等のさまざまな主体とのネットワークを築き、琵琶湖博物館が拠点となり蓄積したノウハウを活かして交流や連携を推進し、新たな博物館活動を展開していく機能を強化する。

(2) 学校等との連携

- 琵琶湖博物館の資料を活用した学校利用を促進し、自主的な問題発見と学びを応援する。
- 琵琶湖博物館と学校をつなぐ人材を育成・応援し、高度な博物館利用をはかる。
- 高校・大学等との連携の強化をはかり、あわせて学校と地域で活動している人びとをつないでいく。

(3) 利用者参加制度

- はしかけグループやフィールドレポーターなど、琵琶湖博物館の高度利用者への制度を整え、さらなる充実をはかる。
- 上記以外に、琵琶湖博物館と多様に関わり、個人の能力を発揮する新たな協力者制度の仕組みづくりを行う。

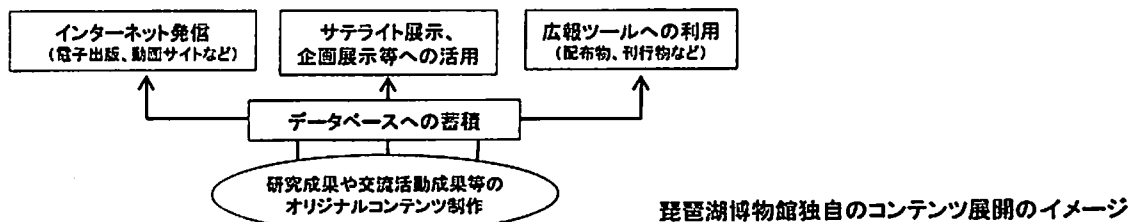
(4) 国際協力機能

- 海外にも目を向けた活動を積極的に展開し、国際的な湖沼研究の拠点となるため、国際湖沼環境委員会 (ILEC) との連携の強化を行い、アジアにおける湖沼研究の窓口をめざす。
- 資料・標本・情報収集、研究、交流、展示の国際化を推進するために、海外の博物館や関係機関と連携を強化する。JICA 博物館学研修等で培ったネットワークを活用して国際的な協定を進めるなど、国際的な活動の幅を広げる。
- 地域と海外の人的交流を促進する。

5 利用者の視点に立った施設設備・運営の確保

(1) 情報をよりわかりやすく、より多くの人びとに発信

- 琵琶湖博物館を多くの人々に知ってもらい、興味や関心をひきつけ、魅力ある情報の収集と発信をめざす。
- 研究・調査や交流活動の成果等を活かした独自のコンテンツを制作し、さまざまな人びとの参加や来館を促す情報発信機能を整備する。



(2) ユニバーサルデザインの推進

- 多様な人が訪れる施設として、わかりやすい館内サイン、読みやすい解説パネル、多言語での対応など、ユニバーサルデザイン化をさらに進める。
- 動線の円滑化、段差の改善など、より快適で安全に移動できる空間づくりを行う。
- さまざまな知覚による体感ができ、まただれにでも使いやすい設備・機器を導入していく。

(3) 安全で効率的な施設・設備の整備

- 先進的な環境配慮型システムやモデル的な設備を検討し、環境負荷の低減や低炭素社会の実現に向けた施設の整備を進める。
- 耐震化を進め、来館者の安全を確保する。
- 老朽化した設備機器の更新をはかる。

(4) サービス向上に向けた付帯設備・空間等の整備・拡充

- 休憩スペース、団体向け昼食・休憩スペースを整備する。
- 障害者や高齢者等も使いやすいトイレ、授乳室などの設備を充実する。
- ロッカー、特に団体向けの荷物置き場を拡充し、また団体向け集合場所を整備する。
- 駐車場からの誘導や照明設置による安全性の向上など、琵琶湖博物館までのアクセス向上を進める。

(5) 互いに有益となる外部資金導入、企業連携等

- 企業や大学のニーズに応え、互いに有益となる連携を構築していく。
- 琵琶湖博物館らしさ(強み)を活かした企業などとの連携を推進する。
- 多様な連携のあり方を提示し、幅広い協力関係を築く。

6 期待される効果

- (1) 過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える深みのある理解の促進
- (2) 地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思う人びとの増加
- (3) 博物館利用が促進されることで、新たな交流が広がり、地域から魅力的な発見と創造が生まれる
- (4) 博物館の利用者(リピーターや新規利用者)が増加し、暮らしの中に博物館が定着
- (5) 関西の命の水を預かる滋賀県からの発信力が強化、内外から琵琶湖地域の知名度が向上